

『政界往来』一九五八年二月（政界往来社） 点

東南アジアへの教育進出

—日本産業の教育史に学ぶ—

矢口 新



はしがき

私は最近十九世紀における日本の産業教育史をしらべる機会を与えられた。というのは、ユネスコの国内委員会から頼まれて、主として東南アジア諸国の教育建設に役立つような、日本の教育史を書くという仕事を与えられたのである。つまり近代国家の建設という点では、日本は、アジア諸国より多少進んでいる。日本の近代化は近々一世紀の間のことにはすぎないが、その間に東洋の文化的伝統をうけた国が、かなり急速に西欧化し、近代化している。東南アジア諸国の中には、極めて最近において独立し、新しい国家建設に邁進している国が多い。もちろん西欧とそれらの諸国との接触は、日本より古い国々も多いが、しかし独立国家として、西欧を吸収し、近代化をとげるといふ点では、これからに属する

も多いのである。それらの諸国は必ずしも日本の行ったような西欧化を、これからやらなければならぬということはないかも知れない。併し如何なる形にもせよ、近代的な体制をととのえ、新しい独立国家をつくらねばならぬことは確かであろう。そういう点で、過去一世紀に日本が踏んで来た道をふりかえって、みてもらうことは、いろいろな参考材料を提出することになろうと言うものである。そういう意図で、日本のユネスコ国内委員会が、計画されたことは誠に時宜に適合していると思うので、私も、及ばずながら、その気になった。とこういう次第で、日本の産業教育史を調べたり、書いたりすることになったのである。

ところで、こういう仕事をやってみて、最近、特に痛感していることがある。その点を

書いてみたい。

外国人に教えられた日本産業

日本の産業教育史を調べるといっても、とくに私は十九世紀の後半に限った。それは近代国家発足の当初の事情がよい参考になるだろうと、想像したからである。特に封建末期に多少のヨーロッパの科学や技術や思想の輸入があつたとしても、殆んどみるべきものがなかったのに、どうして明治の三十年代位までにかかなりの近代産業が、移植され乃至は勃興したのか。その時にそれらの近代産業の世界で働く人間は、どのようにしてつくられたのであるのか。こういう点をとくに問題にしたのである。

こういう風に調べてみると、今日われわれの常識で考えられているような教育の方式ではなかつたのである。少し大きに言えば、今日われわれが普通に呼ぶ教育というようなもの、その時代にはまだ殆んどその態をなしていない。そういう整った形の教育などというものは、ずっとあとになってから生れるのである。そういう整った形の教育が先行して、人間が養成されて、それから産業が起つたのではない。

逆にまず、産業を移植したのである。その場合、人間はどうしたかといえ、それは、外国人を傭入れたのである。そして日本人は

その助手のような形で四六時中、その外人に随従し、そして、近代産業をおぼえていったのである。いわば、その傭入れた、外人は即教師なのである。

このことは、当り前のように聞えるが、実は教育史の問題としては重要なことなのである。具体的な例をあげてみると、例えば横須賀の造船所であるが、これは既に早く、維新前において、徳川幕府によって、設置されたのであるが、明治新政府もそれを受けついでいる。ところでここへ傭入れられた外人は、工場長のウエルニーをはじめとして、末端の職工に至るまで、多い時は四十数人に及んでいる。殆んどすべての部門の人がいて、これは全く外人の工場、外国の工場なのである。そうして、そこへ少数の日本人が学生として入りこんだのである。時には日本人の方が少いことがあったという有様で、更に注目すべきは、そういう造船所の中へ、造船学校ともいべきものが設けられている。工場の技術者であり、職工である人が同時に教師となつて、教育している。これは教育史としては注目してよいことだと思う。つまり、産業の中に、学校が設けられているのであって、産業と学校が一語に進んでいるのである。

それ迄の造船所の経営についての報告書を政府に提出している。それをみると、このウエルニーという人が、立派な技術者であると同時に、また立派な教育者であったことを示している。報告書の中に、学校がうまく運営されないこと、教育がうまくゆかないことをなげいている所がある。一介の技師であるから、そんなことは問題にしないでもよさそうだが、彼は教育を非常に重要視している。それは日本人を育てなければ、日本人の手による造船所経営などということには成り立たないと考えていたからなのである。彼は報告文の最後の所に、今自分が去るに当って望むことは、出来るだけ早く学問知識を吸収し、日本人が自らの手で立派な造船所をつくり、世界の国にその地歩を占めてもらうことだといった意味のことを言っている。この辺のことを読むと、ウエルニーという人の誠実な努力に頭が下がる思いがする。またそういう人物であったからこそ、教育、つまり日本人を育てることに熱心であったこともわかるような気がする。

めでの参加ということがあるが、これは単に出品や見物ではなく、教育として計画されているのである。この時参加した人々が、各国の専門家に教育をうけて、つまり技術の伝習をうけて、例えば養蚕技術の革新をはかり、或は製糸技術の革新をはかったりしたのである。またその人々により、例えば養蚕に関する教育機関が設けられ、それが後に学校にまで発展するのである。

私は日本の現在の教育の発達を見るにしても、産業の発達を見る場合も、このことを忘れてはならないのではないかと思う。つまり産業と教育の発達は、実は併行して、而も産業の中で考えられて来たこと、そしてそれがすぐれた外人によって、全く日本及び日本人に対しての貢献として行われたことである。私は日本の産業や教育の現在は、全くこれらのすぐれた外人のすぐれた見識によって、成立しているということを深く感謝せずには居れない。そのことは、誠に美しい人類の協力の事実として、国境をこえ、民族をこえた美しさとして感ぜられる。涙のこぼれる真実があると思う

東南アジア開発も人類愛的教育から

最近東南アジアという地域に、日本では、非常な関心をよせている。その開拓の基金の問題とか、経済的進出の問題とか、文化交流

の問題とか、いろいろなことが人々の関心をよせている。しかしそれらが、どれ位の覚悟と決意をもって言われているのだろうか。

恐らく、東南アジアの諸国の建設に対しては、日本はやはり先進国として大きな貢献をなし得るという事情にあると考えてよいであろう。それはその通りだが、それなるが故に、われわれは余程の覚悟が必要である。

それがただ通り一ぺんの経済的進出や、文化交流や技術援助であつてよいのだろうか。それにはもっと本格的な人類愛がなくてはならないのではないだろうか。こういうことを言うと、私の言うことは甘きに失するといわれるかも知れない。しかし私は敢えて言うのである。曾て日本が育てられた如く、東南アジアも育てられなくてはならぬのではないか。敢て、日本がその力ありと自負するならば、そこにはかつてわれわれが受けた恩恵を、今度は人に与えるだけの覚悟がいるのである。

そう考えるとまた、日本の近代産業の移植が、常に教育を随えていたということもまた極めて意味深いことと思うのである。東南アジアの経済開発といい、産業建設というも、またそこには、常に教育がつきまとわねばならぬのではないか。そういうものが伴わない経済開発や、産業建設は、本当にそれらの国々を育てることにならないのではないか。

もちろん事実、経済開発が行われる過程に、自然に教育がついて廻ることは間違いない。しかし、そういうことがわれわれに本気になつて、自覚的に考えられているかどうか、ということは結果においては大きいちがいが出て来ると思ふのである。

われわれは、ウエルニーやワグネルの献身に對して、無条件で頭を下げるのである。そしてそこに、人類の美しい協力を感ずる。われわれが育てられたからである。人間的なものが中心にあるからである。こういう教育という考え方もっと表面に出なくてはならぬと思ふ。

文化交流とか、教育というと、とかく日本人は、狭く考え勝ちである。すぐ学校の教育を考える。すぐ文化講演会を考える。或は、日本の古くさい文化の紹介を考える。そういうことが無駄であるとは言わない。しかしもっと真実の教育があると思ふ。東南アジア諸国が現在欲している、その経済開発に對して、産業建設に對して力を借すこと、或は技術の提供などにおいて、その中で真に教育を行うことである。日本が横須賀造船所において、造船学校を設置したように、或は富岡製糸場という模範工場において製糸教育を行ったように、産業につきまとして教育を考えると、或る意味で、あらゆることが、教育的に行

われなくてはならぬのではないだろうか。

教育された思い出は、それが真実であればある程、われわれには、永遠のものとして残る。そういうものが残ることが、人類が真に協力し、平和な世界をつくらうとする、努力につながるのではないだろうか。

東南アを伸ばすことを考える

そこで私は、東南アジアに目を向けている人々に特にお願したい。

今後それらの国々と如何なる関係を結ぼうとも、何時も忘れないで考えてもらいたいことは、東南アジアの人々を育てるための、或は育てるといふことが不遜な言い方であるならば、それらの国の人々が伸びて行くために、力を借すということである。日本の経済がそれらの国に伸びることを考えるのも結構である。日本の技術がそれらの国々の物質的条件を進展させるために、進出するのも結構である。しかし何時もそれに伴つて、それらの国の人々の経済的な能力を伸長し、技術力を伸長するために考えてやるといふことを忘れないで欲しいと思ふ。それを第一に私は日本の政治や外交の第一線に立つ人々にお願したい。最近もインドのネール首相と藤山外相との間に、インドの開発について様々な協定が結ばれたが、そういう際には必ず、右に述べたような考え方を一本通してお

いてもらいたいと思う。出来るなら、東南アジア各国の当局者にもそういう考え方を了解し、その線に立って実際の仕事を進めるように考えてもらうような、雰囲気をつくって欲しいと思うのである。

そうなると、開発の協定が進んで、実際に人や物の動きが始まって、如何なる人が開発に協力するかということが問題になったときに、やはりちがった結果があらわれると思うのである。相手の方でも、どういふ人をと、要求するときに考えるであろうし、こちらからも、誰が行くかというときに、やはり、東南アジア諸国民を育てるといふ考え方をもつた人を、というように考えるであろう。これが、将来、日本と東南アジア諸国との平和な友好関係を結ぶと同時に、東南アジア諸国の発展に役立つことになろう。

一流の人物を派遣すべきだ

次には何といつても人間の問題である。如何なる人物がそういう他国の発展に、協力するかということであるが、これは、何よりもまず、一流の人物が行くべきだということである。日本に明治初期に来朝して、日本の発展に協力した人が、殆んどが一流の人物であったといふことは、我々にとってこの上ない幸運であった。かの有名な北海道札幌農学校のクラークをはじめとして、前に述べたワグ

ネルでも、ウェルニーでも、すべて人格高潔、識見高邁の情熱家であった。そういうすぐれた人物が、これから東南アジア諸国の発展に貢献するといふことが絶対に必要である。

現在日本に、そういう雰囲気がないのならば、やはりそういう筋を一本通した、国策を出さなくてはならぬし、政府がその気になつて、努力をしなくてはならぬと思う。日本人が、依然として狭い日本の世界の中でうごめいているならば、結局は日本が東南アジア諸国と、国際的な協力を結ぶといふ資格がないことを証明しているようなものである。そういう雰囲気を日本の社会から拭い去る必要がある。曾て、満州ゴロ、支那ゴロなどといった言葉があつたが、再び、日本で食いつめたものが他国へ進出するなどという雰囲気を起してはならない。そのためには政府や有識者の真剣な努力が行われたいといけない。

また次に多少細かいことになるが、東南アジア諸国へ進出して行く人々は、教育計画、広い意味の教育計画をたてられる人でなくてはならぬと思う。あらゆる分野に人が行くのであるが、同時に、それが教育となることを考えている人でなくてはならぬ。何もしわゆる教師が出て行く必要はない。否、教師では却つていけない場合もある。特に産業の開発とその中の教育といふようなことを考えるときには、今の日本の教師は却つて役に

立たないのではないか。本当の産業教育をやる人は教師の中には居ないかも知れない。あらゆる制度や組織が出来上つた所では、教師も役に立つが、あらゆるものをはじめから特に産業そのものを始めからつくりあげるという場合にはいわゆる教育者は不資格ではないだろうか。

教育の建設は、一定の形の教育を他国からもつて来て移植するといふ形で行うべきではない。あくまでその国の歴史と現実の社会の中から打ち立てるべきである。その意味では、如何なる産業を歴史と現実の中でどう打ち立てるかが考えられ、そこではじめて教育の問題が考えられなければならないと思う。教育者でもそういう筋道で物が考えられる人ならばよいわけであるが、教育者はとかくそういう考え方は不得手である。

以上のような意味で私は、教育の計画をたてる人と言つたのである。結局はその国に適合した産業を育てることが出来、従つてそういう産業に働く人を育てることを計画することの出来る人なのである。私は教育ということとをこのように考えて居り、従つて教育者といふものも今の学校の教育の中における何々の教科を教える教師といふ意味ではない。

国内でも本格的な東南アジア研究を

更に次に私は、右のような東南アジア開発

に力を入れようとするには、日本でも本格的な開発への研究が行われなくてはならぬと思う。日本で現在行われている東南アジア研究はどの程度のものかよくは知らないが、大切なことは、単に経済的進出の対象としての東南アジア研究でなく、それらの国々の健全な発展を考えての研究である。経済にしても、文化にしても、教育にしても、外国の人間がただ自分のもっているものを持って行ってやるといふようなことではいけないのである。

従来東南アジアは多くがヨーロッパの植民地であったが、ヨーロッパ諸国の植民地の取扱いで最もいけないことは彼等をただ物質的、経済的な産物の提供者としか見なかつたことである。一つの民族がつくっている一つの社会としてみとめなかつたことである。それらの諸国の独立はこれをくつがえした。彼等は恰も一個独立の人間が基本的人権を認められて、その意志でその生活を営む権利をもつように、一国として自ら生活する権利をもっている。彼等は独自の文化をもち独自の経済組織、政治機構、教育体制をもつて社会をつくりあげるべきである。そういう彼等に協力するのがわれわれのつとめである。

新しい民族国家の建設に当って彼等は、自己のもつ伝統を生かし、現実を考え、先進諸

国の事情を考慮して自分自身の道を歩くであろう。そういう彼等と一緒に協力をしてやるような東南アジア諸国の研究が日本に起つて然るべきである。

この研究は、やはり自らの目をもって、彼等の中へ入つて研究するような研究でなければならぬ。私はよくは知らないが、現在の研究の多くが、ヨーロッパ人の研究紹介であつたりして、間接的であるような気がする。同じ東洋の国の仲間として、自ら進んで現地へ入つて研究するような研究が行われなければならぬと思う。

これも併し、やはり指導者階級や、政府当局などの、そういう雰囲気起すという努力からはじめられなければならない。文化交流などということも、そういう意味の学問的協力として行われて欲しい。単に知識の紹介や講演でなく、真に研究に協力するという雰囲気で行われて欲しい。

開発にはチームワークで

なお最後に私は、東南アジア開発に対する各方面の協力ということを提案したい。特に教育者と各産業界の人々との協力ということを真剣に考えて欲しいと思う。それはまづ前に述べた研究ということについても当てはまる。研究が、個々ばらばらで行われていては実りがうすい。それではやはり結果とし

て、ヨーロッパ人の文献を読むという程度に終るのである。現地へ行つて自分の目でとらえて来るといふような研究は、多くの人々のチームワークで行われなければならないのではないか。また、例えば産業技術が輸出されたり、経済開発の協力がなされたりするときに、それと共に研究チームが進出して行くといふような協力の仕方もあろう。

また、実際に経済開発に何らかの技術援助をする場合に、それと共に、教育を考えたり健康や衛生を考えたりする人々が協力して、一つのチームがつくられて、人々の生活全体を向上させるような援助を考えるといふようなチームワークもあろう。

このようなチームワークが行われるためには、もとより相手国との深い了解が必要であるが、それは、まず日本の政府や外交の当事者が、こういう仕事の意義と価値を理解し、真に人類の向上ということについての理想と情熱をもつことである。そしてその背後には国民全体がそういう情熱をもつことである。そういう理想と情熱とが、世界の人類を向上させ、またわれわれもそこに自己の存在の意義を見出し、かくて真の平和的共存も可能になるのではないか。